

葉の言の頭巻

人間の叡知

人間最高の叡知を体得し、その叡知をもつてすべての人々を救済して行つた人、それ以インドの聖者アシタ釈尊でした。仏陀の教えは神のため神の教えではなく、人間のための人間叡知の教え空のとす。神に隸属せしめる教えではなく、必ずからむ能となつて人天ともに歎美せしめる教えです。

遺所に王となり、人法ともにすべてのものを包摶ぐとして、光明凜然たる日輪大刹の世界を創造するもの、それは釈尊の觀智を蘊藏した法華經です。法華經は人間の觀智を導き出す人生書、知能をもとに信を与える案内書……因し信より現れて来るものは、それ以、歎知より現れて来るものそれと、迺廻に何らの相違はないのです。

六牙白象

鷲峰 新年特大号 目次

オ2巻・オ1号・通巻オク号

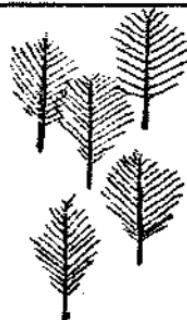
人間の觀知	1
新春に思う・一国一字	日高白象 3
乙女の鼓	福本江惣 3
白鹿の要鷲山と日本の身延山	日高白象 13
出家の動機・あれ仏子と生れて	小寺宗元 21
祖廟に祈る	木村義賀 35
信仰相談室	
創価学会の動向と	
日蓮宗青年運動の在り方	日高白象 45
讀者の声・オ六号をよんで	介鋼志能 57
教義説明・二度とない時	沢田覚象
魔女と僧侶	小林白峰 34
身延山学生行教説明会 九州街頭行教予告	62
贊助会員・東京募集	56
編集後記	63
題字・身延山法主曰顕純下	
表紙・大阪東洋印刷社印刷寄進	
表紙写真・インド重鷲山へ渡る身延山の金剛院尊像	

新春に思う

一国一字

今年はこの抱負で行こう

日高白象



奈良県下を轟震宣令中、或る町の或る町かど
さびれて一軒のお寺がありました。壁は落ち、屋
根にはベン／＼車がはえっていて、さながら枯藪仏
教の末路をみせしめにしているかのように荒廃し
ていました。宗派は天台宗のようでした。その門
前に一基の石柱が立っていました。百姓たる
「一国一字」

という碑文が刻まれていました。「この文字で心
ひかれで山門をくれば、本堂正面玄関の上にと
同じ文字の扁額が掲げられたま、風雨にさらされ
ていました。

想し一国一字といふこと……それは何と力強い
高邁な理想をうたいあけた言葉でしょう。一つの
國た一つの道場を建立し、それを中心として一國
の精神文化を指導興隆して王公冥合の、不滅の榮

主と建設する、というのです。

暫し私は、この偏頗を見上げてい
ました。そして荒廃したお寺の境内
建物を見渡す時、今更ながら無量の
感慨を深くせざるを得ませんでした。

思えば天平十二年六月十九日、聖
武天皇は日本国内の国々に、法華
經の書寫と七重塔の建立を勅令し、
翌る天平十三年三月二十四日には東
大寺を中心として、再び国々に国
分寺と國分尼寺の建立を勅令されま
した。「これはとりもなおさず一国一
宇の理想にもとづくものであつたの
です。

伝教大師の比叡山戒相建立も又そつ
であり、日蓮聖人の生涯三度に及ぶ
國家諫諫も、本門の戒相建立の象え
ど、一国一宇の理想実現にあつたと
いうことが出来ましよう。まだ從つ
て日蓮聖人滅後における東門先帝生
哲の、一天四海皆帰妙法を擬印とし
た死身弘法も又、一つのためであつたと
申せましょう。

一天四海皆帰妙法という言葉が、
単なる掛声であつたり、圓向文の飾
り言葉であつてはなりません。また
その隠意がお祭の時の装飾品たるつ
てなりません。

龜真和尚の唐招提寺戒相建立も、

今日、宗門遺稿の中で最も又けて

このものは、一の一国一宇の理想に対する使命觀ではないのでしょうか。

日蓮宗寺院五千ヶ寺、一都一道二府、日十二県の日本國に、今や日蓮宗寺庭のない所とてあります。これでいへば、國外の開拓ことに、一國一宇の運営へ、さうの使命觀が宗門僧俗の中へ吹き込まれ、日本一國にわたる本

事で、其圓満が、遠に擴ひ立くなつて来る、ことでありましやう。

既に海外に轟じて世界の國々の中、に一ヶ寺でも日蓮宗の寺院のある國が、果して何ヶ國あるかとみれば、アメリカ、インドの一部を除けば殆ど皆無に等しく、お題目の声すら聞

いたこともない國々ばかりです。

このまゝ、そこで、どうして一天四海遍妙法の祖體が選成されまして、ます一國一宇、一國一人の地圖をもつた宗教者、が国内は勿論のこと、遠く海外の界まで身を離して正法を宣布して行かねばなりません。

宗門は、一の而教體制を速かに整えると共に人材養成を急がねばならぬ、のです。

お歓迎ごとに、成道沖一年目、私弟子六十人が出来た時、皆を渠

「教導、今まで私が教えた教え

をもつて、それそれを布教の旗に立つ
がよい。但し同じ地方で二人以上で
行つてはならない。私もまた一人で
行くであろう。」

そこでそばにいたフルナ尊者に、
「此の決意、相輔」

と仰われました。尊者は答えまし

た

「私は未開生蕃の地方へ一人で布
く巡ります。そして苦しいの、しら
れなならば打たれるよりもよいと感
謝します。若し打たれたならば新ら
れるよりもよいと感謝します。若し
斬られたならば殺されるよりもよい
と感謝します。まだ苦し殺された刹

那に日本遠を齋んだと感謝します。
かくして尊者は未開生蕃の種族
の中に多くの人々を説教し、後にお
家迦古の十大弟子の一人に数えら
れ特に「フルナの弁」といわれるよ
うに弁競オーとうたわれるに至った
のでした。

お家迦古の伝達オ一年目に、既
に一国一人、一国一字の実践があつ
たといふこの事実は、その後三千年
の仏教伝道の「史を通じて、今日反
お深く考えさせられる」とではない
でしよう。

まだ一国一字ということを家庭の
上でいうならば一家一仏とも申せま

しよう。一国を中心精神が元首にあるのではなくして不正法の道場であるよう一家の中心精神もまた、主へにあるのではなくして夫た、仏法僧の三宝を祀る仏壇にあるのです。

正法の仏壇、そこから家庭の平和と繁栄がもたらされます。仏壇が輝いていれば家庭も輝いています。

「自分の家は分家だ。その上、死んだ音もしないので、正法口ない。だから仏壇の必要はない。」

という人もいるようですが、位牌の

有無にか、わらず仏壇は、人間の心の中にある三宝を安置する戒壇であります。

松園に先祖の位牌だけ安置して三宝を祀っていないの日本末顧創も甚しいものです。三宝戒壇のない家庭はお寺に本尊がないのと同じです。そこには靈験毫釐が亂れ入り、災難が纏出して参ります。また三宝戒壇があるとしても日々々々これ正中心として家庭生活を営む、ということがこれまでいければ、不和、災難は忽然起きて参ります。三宝戒壇それでは家庭国家・世界の中心です。

新春を迎える今年こそ一国一宇、一家一松の実をあけて行こうでありますせんが。

それは昭和三十八年の正月、まだ盆の内の二と三でございました。

ヘイ

鼓

惠よしよ本圖

乙女の



寒風吹きむらす大阪駅のアラットボウムで、二十二、三の同じ年齢とあはしきスマートな近代女性が三人、高知山駅の列車を見送っていました。

ただそれだけのことならほ、駅では何時でも見かけられる風景なので、ことさら取りあげて申しあげるほどのことでもございませんが、奇異と申しましようか、奇麗と申しますようか、三人とも前つてウチワ太鼓をうちちらしながら、一心中お題目を唱えていたのですござります。お顔をとみれば、三人のお嬢さんの両眼には、眞珠の萩に輝く涙がどめどめなくあふれては、美しい顔をめらしていまし

一方、見送りをうけている車中の窓辺には、身延山の白鉢巻も漸々しき、墨染の衣に手甲脚絆、行脚布袋の姿をされ、青年僧侶が十数名、これも溢れる涙もろくわすに、見送る三人のお嬢さんたちに向つて合掌

嘆願してござります。

流行の洋装を行く近代衆と、かたや古色蒼然たる行脚姿の青年僧侶、そのコントラストの異様さにまたしても、あたりに轟くはカリ法鼓高らかに打ちならし更に顔を涙にぬらしてまで別れを惜みつゝ、合掌嘆願している有様には、曰處とも接觸している大阪駅のアラツトホーム、松の内ともありながら、その場をたまつて通りす

ればなおさらのこと、早始に行き交う群衆の中には、誰一人として奇異の眼、驚嘆のまなざしを向けない者とてなく、中には立ちどまつて暫く眺めている者もいたほどでございました。

へ2へ

私も身延山とする日蓮宗の信者の一人でござります。

へ行脚僧の方々が、身延山という、白鉢巻をしておられる以上、これはきっと身延山から来られた行脚布袋の方々に相違ない。

と思つた私は、先きを急ぐ身であ

るにものびす、お邪魔にならない所にたずんで、暫く御一行の姿を遠くから眺してました。

その中、行脚僧の指導者らしきお方が、所用あってか車からホームへ降りて来られました。私はすかごく驚けよりました。そして事情をお尋ねしました。

それによりますれば、この行脚僧の一行は、予想した通り身延山より来られた街頭布教隊の方々で、身延山の大学高校に学ぶ学生有志たち、正月の冬休みを返上して関西方面に街頭布教を展開しているとのことでございました。

また見送っている三人のお裏さんたちの一人は女子大生、他の二人は会社勤めのBG、布教隊が新年早々京都、奈良方面に街頭布教を展開して以来、布教隊に従つて終始行動を共にし、いよいよ布教隊が奈良から長駆して山陰の福知山市教へ移工廠とするに当つて別れ忍び難く、わざわざ大阪駅まで見送りに来られたものということがあります。

△△△

見送る者も、見送られる者も、互に合掌しあい礼耳しあい、そして法輪にもせざむの中は、あそらく酷寒の中、それまで共に辛苦を分つて展

開して未だ街頭書教宣令の、嚴しき立正安國の祈りと、その感動で一杯であつたことをございましよう。

お寺や家のなかにあるならば免も解

も、難堪する大放駄のアラートホー

ムで駄も外風もなく、学生布教隊の

方々と共に身じろぎもせず、頬をつ
涙もぬぐわず、一心に祈るが如く垂
駄遍處している教徒たる三人の乙女の姿……それを見る信仰なき人々は
何と思ひましようとも、法華経を奉

する私たち信徒といいたしましては、

物貞文明を押し流されて精神文化の

あろそかになつて輕佻浮薄の世の中

で、このよくな青年の姿を発見する

時、ともすれば忘れ去られ勝ちになつてしまふ大業相応の國、日本國の本來の姿を、眞實に再確認せしめられる思いをせずにはおられなかつたのです。

八四

法華經の中には、特に人間礼拝の教文が藻詠されております。人間が人間を敬うこと特に仏陀を敬うが如くにするという。そういう集いの中にこそ、

我がこの土は安穩にして

天人づねに充満せり

園林もろくの堂閣

種々の室をもつて莊嚴し

宝樹花果、多くして

5

衆生の遊樂する所なり

諸天、天鼓をうつて

萬物もろノヘの後樂をなし

愛恋羅草をふづして

私あよび大家に散下

という本仏本時の風光は、事相として今こゝに現成されていると申されます。さればラットホームでうつこ女のつゞみこそ、天人の天鼓でなくて何でございきしよう。

近くでた、すむ程も、何時しか合掌し、つゞみにあわせて共にお題目を唱えていたことをございました。

やがて汽車のベルが鳴り出しまし
た。列車は離かたホームをすべり出
しました。この女のつゞみは一般ど
え、唱えるお題目の声は、いよいよ
高調して行きました。

そして汽車が遠く見えなくなるま
で、つゞみをうつ三人のこの女は、何
時までも何時までも、ホームにた
ずんでお題目を唱えつづけていました。

だ。

筆者注
身處山特別大本願人
大藏・國本組合長夫人



印度の靈鷲山と 日本の身延山

二の西山が法華聖で結ばれる時
世界久平和の基盤が確立される

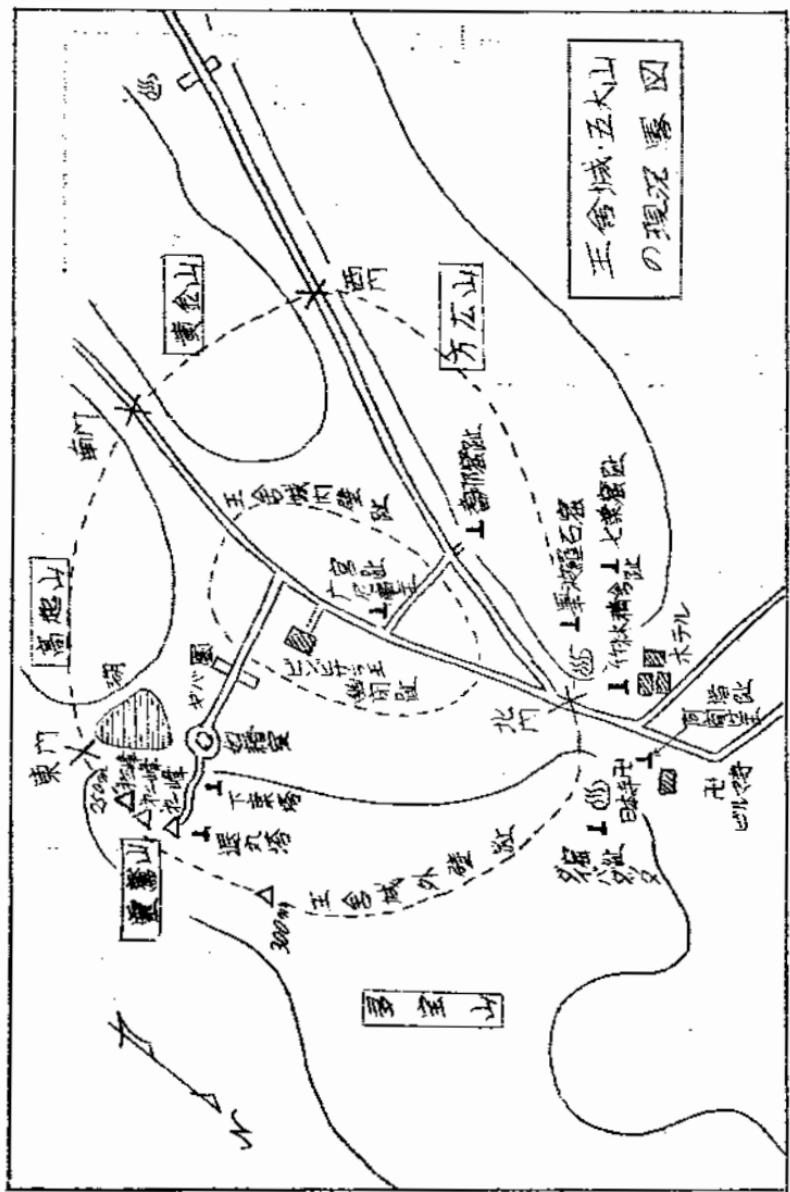
方 一 回 高 日 白 象

お釈迦さまと ビンビサーラ大王

お釈迦さまは二十九才の年、王位も妻子も財産も、世俗の一切のものをふり捨て、放威力ビラの門を出、出家して一分の求道者となりました。そして修行しながら南へ南へと旅を抜けました。やがてガングア河を渡って、マガダの首都王舍城へ入りました。

当時、王舍城はインドの国々の中でも、最も文化の栄えた都であり、その周辺の森林を園林

王舍城・五大山
の現況図



には、多くの修行者が集つていなか
らです。

お駆除さまは、暫く此の地に留ま
りました。そして時折、町へ花鉢に
出かけていました。

「ま／＼城街を巡回していたビし

ビサーラ大王は、折から花鉢中のお
駆除さまの修行姿を見かけました。
大王はお駆除さまの姿を一眼見るな
り。

「これほんとうの人ではない！」
と感じました。大王はさっそく近
かよって申しました。

「貴方は青春に富んだ端正な青年
である。身かけるところ、させかし

由縁ある武士の出身であろう。出家
の身であるとは如何にも嬉しい。俸
禄は貴方の望むまことに与えるから、
今からでも我が精銳なるマガタの軍
に加わり、三軍の指揮をとつてもら
いたい」

「お駆除さまはがえりして！」

「大王よ、如何にも私は、ヒマラ
ヤ山の麓、コーザラ国に属している
カピラ族の王族、貿易と勇氣を兼ね
備えたハ太陽の末裔」と呼ばれてい
る駆除族の太子である。

然し大王よ、私はその王位をもす
て、眞実の道を求めている。今さら
世俗の欲望は顧みる所ではない」

大王は、お釈迦さまの出身の高貴なること、・求道の決意の並々でないことを感じて申しました。

「それならば、若し貴方が修行を成就して悟りを用かれど時には、どうか私のために貴方の悟道の法を説いてもらいたい。その時、私は貴方の教えに従うであろう」

お釈迦さまは大王の頼いに應えました。そして

「成道の晩には、きっと……」
と固い約束をかわしました。

それから六年の歳月、お釈迦さまは死よりもつらい苦修練行をつづけました。

そして三十五才の十二月八日、曉天の明星を仰ぎてから、尼連葦河のほとり、菩提樹の下で、人間最高の歎悟を成就し、悟るべきすべてのものを悟りつくして仏陀となられました。

それよりお釈迦さまは、三七・二十一日の間の深い冥想に入られて後、曾って求道を失したことのある五人の修行者のために、わざく三百キロも離れた鹿野園まで赴いて、初めての說法教化を施しました。

また、その国の都に入つて、富豪ヤサをはじめ六十人の人々を導きましした。更にウルダーラという所に至つては、

バラモン僧の迦葉兄弟をはじめ、その弟子
千人余りの修業者をも育成しました。

それより暫つて修行時代に近いソニビ
サーラ大王と語んだ約束を果すべく、
暮い来る千余の仏弟子たちと共に、
象頭山を出てマカダの首都王舍城へ
と向いました。

近頃はまだ昔のヨーロッパの宗教家アルベー
ラ聖徒を教化したお教祖さまの威容

は、既に三舍城にて顕現いたしました。
ソニビサーラ大王は、さっそく家
来を従えて王舍城の西門を出、林

王舍城の北門郊外の静寂な竹林園の
隣地を寄進しました。

まことに王舍城の一乗者は、さっそく
この園林の中に六十棟の精舎を建て
て、農田に寄進しました。
という處までお駆廻さきの一軒を出
迎えました。その出迎えの地点は、
今なお林精舎として残っています。
そのまゝ残っています。

お歎迎さまと千余の仏弟子たちはこの竹林精舎に起居しながら、毎日のように王舍城街へ赴いて花鉢修行をしました。

また王舍城の東門北方、地表およそ三百メートルの多宝山より流れ来るならかず丘陵費巖山の山原において、お歎迎さまは、黒山のようご回集する仏弟子や、城内よりも集り来つた人々のために、多くの教法を説かれました。

お歎迎さま一代八十年の御生涯において説かれた經典は、通常八万法藏と申されていますが、一代の肝心たる法華經をはじめとして、阿弥陀

經等々の多く經典は、この王舍城と靈巖山を舞台として説かれたのでした。

このようにお歎迎さまの御生涯の中、しづくへ、この慈が說法の場所として選ばれたのは、前にも述べてきました。マカタの國が當時のイング蘭國の中でも最も富んだ國であり、その首都王舍城も、他の都市にくらべて最も繁榮した都城であると共に、國王ビンビサーラ大王がお歎迎さまに帰依して以来、仏教々団に対しても積極的な外義を惜しまなかつたからでした。

また王舍城での布教といえほ、主

として靈巖山の山頂となりこれたのですが、それは靈巖山が王舎城を圍む五丈の山でも最も高もたらかなる

易い山であり、しかも王舎城は一

望に眺められる展望台耳し、お駕迎

さるが山頂に立てば、無量の大衆は

山頂を中心として山麓四周に延びし

て、お駕迎さまの説法を聴くの大便

利もよへ、ともかく靈巖山が王舎城

馬込の中でも、説法の場所として最

適した地形であつたからでした。

靈巖山の説法、それはあたかもキ

リストの山頂の垂刻を思ひしめるも

のかあ、天下一とてしよう。

今なお山頂には、わすかばかり平

らかな広場があり、その中央には地
来香室といふ、お駕迎さま説法の宝
座が残っています。

また、これより少し降りて廻には
千数百人も収容されるような広場が
あります。おそらく仏弟子や信徒の
主たる五人以上、ここで山頂の説法
を聽かれたことでしょう。

お駕迎さまが靈巖山で説法これら
時、信仰あつせん、「サーラ大王は
その都度、附近のお供区つれて參詣
聽聞したことは申すまでもあります

靈巖山の山麓から山頂にかけて、

今なお残る石段参道こそ、ビンビサ

「ラ大王が参道に生還した王者参道の道であり、名づけて「ビンビサーラ大王石菖蒲参道」と呼ばれています。

またその参道の途中・奥の馬の象の前にすれり過ぎたセガラ大王が美物から降りて、それから上口歩かれたと「下乗塔の駒」があり、更に登ってだけは山腹の近くに、退路駒といって一般の人々は、「これから上へは登ってはならぬ」とされた地標が今日なお残っています。

おそらく靈巖山の山頂には、お祝祭さきを中心とする千余の仏弟子や名ある信徒が開集するため、退路

といふものが設けられたのであります。

それらの遺跡を見るだけ、今まで二千数百年前、ビンビサーラ大王がインド諸国の中を並びなき王者の身でありますから、民衆に率先して、如何にお歓迎されたに帰根し、仏法に帰依し、そしてその教団に帰依していくかという、その信仰の厚さが想はれて来るのです。

〔以下次号〕

21

出家の動機



我れ公子と生れて

身延山学三年

翠巒等著

父の修行伝道

私の父は日蓮宗の僧侶です。もう七十九才にもなります。然し德居もせず、今なお社會をこのく氣骨で、日破法戒を守りつゝ而教云々達といそこんでいます。

私はその一人息子です。私は父の子として、また弟子として、父を薦りし體と仰いで、又の名とて進んでいるのですが、今私の出家の動機を述べんとするならば、何よりも先ず父の修行伝道の概要を語らねばなりません。何故ならば、この父あつての私なのですから。

父の実家は、京都でローソンクの製造業を営んでいました。中産階級の裕福な家庭であつたらしく、父は幼少の頃から青年期にかけて何一つ不自由もない、むしろしたい放縱のことと氣呂に出来る毎日であつた様です。

前が二十才の年、突如、家業をすて出家し、京都日蓮宗本山立本寺の仏門に身を投じてしました。

何不自由もない落福な衆座にして、片

端でもなければ病氣一つしたことのない元氣な父が、何故出家してしまったか、という理由にしても軽穢にして、父の親兄弟や周囲の人々には全く想像も貰当もつかないことであつたのです。

さて父自身このことについて多く語ることはありませんでした。たゞ出家後の父の修行の様子と、そしてその後數十年た劬苦しい毎夜常精進の姿を通してのみ、出家発願の並々で序かつたことが推してはかられだけにすぎません。

立本寺僧堂の人など、たゞ父は、修行の

田雙あつて應用もあつたさうですが、それも京の前、やがて立本寺の門を出、ウチワ大歎一本と身を耗して、全国修行に旅立つて行きました。

世俗をして、出家した父たゞ、仏門の内にも世俗と何ら変らぬものを感じて、家を出たように寺を飛び出たのでしょうか。誰がな」と日本少しだけりません。

但し父が、仏閣毘盧の中の修行よりも野に伏し、山に伏し、或は巣にうだれ、或は新妻妻修行をする中にこそ、より眞実の修行を見出そうとしたことは、その後數十年にも及ぶ全国行脚修行の歴しさを通じて推察する」とが出来ます。おそらく父は法華經傳渡達多品口才十二の中に、

法のための歎

國位をすて、

まつり」と云太手にさかせ

義五つて四方に宣令して

法を求めき

といふ「東叡宣令四方求法」の八字を
身をもつて体験しようとしたのであります
しよつ。

京都をたつた父は、おやや一晩で朝駆

出たもつて、それより日蓮大聖人の足跡
をたどりながら西行し、鎌倉に海上に、
そして小糸・瀬澄・小松原等の靈跡を
めぐりつゝ東北へ足をのばし、六毛僧曰
舟上人海外伝道の旨を聞きつゝ雪の北海
道を一巡・やがて日本海に沿つて大陸へ
下り、寒山佐成り島へも渡り、かくの如
にして日蓮宗五千ヶ寺のキ々にはきうま

でもなく、全國津々浦々、文字通り足の
踏み入れなかつた所はないまでに、東叡
修行しつゝけたのでした。

それは兩度たれ風とさらされ、夏の
暑さとも冬の吹雪にも堪せぬ、だゞ一人
で歩き通す修行だつたのです。父の靈能
は、こうした超脱修行の中に自然とそな
わつたものであつたしよつ。

後年九州へ入り、熊本で修行中、私の
母とめぐりあい、前生よりの因縁あって
か、結婚して此處に落着き、立本寺出張
所という道場を開いて、初めて布教に専
念するようになりました。

信者は纏々と集まりました。父の修行
の歴史に引かれ、父の靈能に敬いを求
めて来たのです。然し父は、まあいう人

人に對して、嚴しく口舞のようと申しました。

「私は法華經を弘めるのであつて、御利

益信心を弘めるのではない」

「私は法華經信者を教えるのであつて、お寺のお客を教えるのは何等ない」

人々は父と共に嚴しい修行を重ねました。そして第金入りの信者となり、幾多

豪車巨麗の体験を藝人を行つたのです。

当初の立本寺は豪財、これも近耳改称されて、今日曰蓮次宗恩教會と呼ばれるようになつてゐます。立本寺蓮田町新屋敷五三番地の道場がそれです。

父は常に私に申しました。

「百の談義をもつて人々の耳目を引くよりも、单刀直入、勧説の利器をもつ

て頑固の心魔を懲懟せしめよ」

得度式前夜の奇瑞

私は、「うした父の子として居酒十八年一日十三日、鑑道をかつては奇しくも宗祖初翻縁日（身延山無量壽院）の日と生れ、こうして畢竟の中に育てられました。

兄弟はなく、後に先きた母子妹は私一人です。一人恩子だけに西服からご用に入れても驚く程いほど可憐ながらまし

然しその反面、よその子も受けないようひ較しいしつけを受けて来ました。既に三才の耳から、毎月一週間欠かず水行させられたのです。疲れもしません。

ものじつと聞くから。

「お前は、お題目の中で、お題目によつて生れて来たのだ。」

「お前は、法華經の義に生をつけ、法華經の義に身命を捨て、行くのだ。」

「じつこそばかり、耳に聞かぬ大なる法華に聞かざれ音でられたのです。」

般若の余慶去りやうの昭和二十四年、私は六才でした。その冬父に言われるまじ門に入るべく、算度式をつけるゝことになりました。得度の寺は曾つて父が二十才の時、出家得度した寺と同じ京都の立本寺と定められました。

孫子二代、奇しき因縁です。父の慈教はいがはかりであったことでしょう。おそらく三十五年前、冥室をして、仏門に入りました。

入った時はのことや、その後、凡の如く全く全国を行脚修行し歩いた過ぎたことに導かれて馬灯の如く思い出されでは、今得度しようとする我少子の上に祈らせるを得ない切迫するものが、老い胸をしあつけました。このことによつて、

三月十六日私は阿観につれられて波郷熊本を立ちました。六才の私としては、京都までとは生れて初めての旅でした。乗しかるべき車中、思ひもかけないことが起きました。私が意識をハシカにかかりてしまつたのです。途中二十一時頃の汽車の中、私は高熱に苦しみ運しまし

空港のこと、て車中乗りあわせた医者

とておらす、もとより薬の用意などあつ
はずはありません。

両親は着ていた自分の外套をぬいで、
し、かりと私をくるみ、真剣さも出来な
い高麗列車の迷惑を、かき分けがき分け
洗面所へ往復しては、めらしくタオルで
私の頭を冷したり、オロオロしてボラ一
疎もどすに看護してくれました。

その時の両親の心情は、当時理解出来
なかつたとしても、今から考えてみます
れば、私の病棟ともなるものがあつたこ
とでしよう。

らめしく思いました。

京都駅に降り立つ私と、京都特有の
あの底さえする寒さに觸ふるいしながら、
あたり一面白銀にお、われに雪景色をう
そして、今お辭りしきる旅館の中を、
ひよれる母と老いたる父に手を取られ、
両脇から抱きかかえられるようにして、
駆けらおよそ一里の道のり、駆まされ
まされ、一步々々と雪をふみしめるがら、
解度の内、立本寺へと向つて、よろめき
ながら歩いて行きました。そしてお寺の
山門にたどりつくや、その陽にベツタリ
崩れてしまつたのです。

直ちに車裏へかゝえ込まれ、上を下へ
の大騒ぎする中に、かけつけた医者の手
當を受けたのですが、その時の朦朧たる
意識の中に、今なお焼きついて忘れられ
ないのは、長かつた駅から立本寺迄の道

をぬいた綿の布の上だと、真白く降りつ
るもの雪さえ払い落さず、白い鳥たちは生きな
がら私の名を連呼して廻ましてくれて母
の母と、その声です。

愁しい時、苦しい時は、そして失意と
喜びの時、少しうれしがえて来るのも、
悲しき時に泣きながら泣かれた他の母の涙
が、涙には必ず母の涙の母の涙

か、わらず、少しも妖魔の気配すらあり
ませんでした。

母は私の枕とに付き切り、父は朝と
いわす晝といわす、夜中といわすに四六
時中、時をかきわす雪の庭に出、比較お
ろしに吹きながらさらされながら、寒りつ
めで氷を割つて口は水垢離をとり、

「諸天、この仏子を助けだまえ」

と、私の幼名に相應に叫ぶが如く呼び
掛けた母の懐の声です、勝て焼きついた
悲母の聲、耳朵にこびりついた懐母の絕
叫、それ曰終生、仏道に生き抜く私を励
ました行くことをしよう。

さて文本寺の一室にかゝえ込まれた私
の病状は、医者や父母の手厚い看護とも
親もとたつき切つていた母は、私の護

きを聞くにつけ、

八如何に吉祥經の事とはいえ、六つに
すつてばかりの子供を、無理と承知で東
都まで連れて来たのが悪かつた。/
と千々に胸も裂け、腸もち切れる思い
で、こゝを先途とばかりにお題目を昌え
寝友徵して神仏に祈りつけました。父
の水行が一段と厳しくなつて行つたこと
は言うまでもありません。

私は夢に逢ひされてしましました。おそらく生死のかじたままよつていたのでし
ょう。それは夜中の三時頃であつたとい
います。急点の定まらぬいつるんだ裏で、
毎をみつめながら邊きのようだ、

「きれいなお坊さんだが、おいでおいで
をしているよ」

と言つたそうです。これを聞いた母は、

もうこれまこの世の終りとはかり、目の
先が眞暗になつてしまつたそうです。

私にはそおいう讐言を口走つた覚えは
めとよりあるはずはありません。然しこ
の時、私は夢であれ、うつであれ、確
かに、この目でお坊さんの姿を見たので
す。

そのお坊さんは、五十年薬の科學を兼
ねそざえに、神々しいばかりのお坊でし
た。威厳に満ちた堂々たる容姿、そのま
まさしは整然とあふれていました。金算
風と背景にし、十二策の袈裟をまとい、
御衆に坐り、左手には松子を持つて、右
手を私の方へ差しのべていました。

母が聞いた私の讐言では、そのお坊さ
んが「おいでおいで」としてましたという

ここですが、それは六才の私の感じ方を
あつたのでしよう。

今にして思えば、それは「おいでおい
でしをしていたのですほんくて、実は六才
の私は九月の寒から京都までつれて来、
高熱をおかしてまでも出家歸度しようと
する私の父母の、その迷惑の折りに感心
して、自らか手を差しのべながら、

「よきからぬ子、よきからぬ子」

と、手のひらで私の額を三度び撫でられ
たのではなかつたか、と思わしめられ
るのです。

ともかく、その靈夢があつて以来、不
思議なことに熱日がん／＼下つて行き、
疫の聞ける立刻までには、病床に寝たま、
困がらうつした、麻疹風を一句一句習

つては唱えられたことになつていきました。
それまでの私は、片言も書けはじめた
幼少の頃より、親に仕込まれてお題目は
かり唱えていたのですが、いまだ唱つて
お終り前經偈も唱えたことはありません
でした。それなのに既も既・死の危機を
脱した利那から生れてはじめて前經偈を
唱い唱えたのです。

それは、かけがえもない一人息子が、
危篤状態から奇蹟的に救われて行く有様
をまのあたりにした母が、それをそのまま
ま法華經の現証の利説と感ずればこそ、
あいたてまつること書き法華經にあい奉
り、既じててまつること書き法華經を傳
じさせて廻りているという感動のあまり、
「無上甚深微妙の法は百千万劫にもあ

いたてまつること難し。我れ今、見聞し受持することを悔たり」

「いつ開經場の一句くを、我れも唱え、我が子にも唱えさせずにはおられなかつたからありますよ。

三月二十日、夜が白々とあけぐめる頃、まだ顔は多少赤みがかっていだそうです。が、熱は完全に平常ともどつていました。私は床から起き上り、顔を長い口舌すこぎ、衣服を整え、両親につきぞれで本堂へ上りました。

そして朝の勤至にひきつづいて、立本寺^{立本寺}加藤監督下尊仰のもとに、無事御度式をあげる事が出来たのです。

その後加藤監督さまは亡くなられましたが、私が大きくなつても父は跡折りそ

の時のことと腰かしげた苦つてくれます。あの時、わしは自分の寿命を縮めてさう、お前の命だけは救つてくれ、と祈願したものだ

とつぶやくことでした。おそらく父としては、我が子を救うといつよりも、もしろ私を救つという、後にも先にもないほどの大祈願をこめたのでしよう。それだけに当時のことが懐しく思い出されるのでありますよ。

私はこの話をして聞くたびに父母の慈愛に感謝せすにはおられません。そして父母の恩に報ゆるためにも、

「父母の期待に添えるような私などはないのだ。本化の沙門にするのだ」と決意を新たにしたことでした。

折言顕は生きている

摺言式をすませて小学校三年生になつた冬十二月の二日、私はふと風邪をひいたことから寝こんでしましました。

二日たら三日すきても、一向に回復しません。母も首を下しほていました。所が四日目の朝、動けるすぎた父から、

「お前が気が付くまで黙つていようと思つたが、今月はまだ水行をしていない。娘は、子供心にも反省めいた不満を覚えます。

「へ下へへしてしるど、父から面の如く此り飛され、泣く泣く御宝前に坐つて自分の不心得を認ひ、裸に呑つて水行馬へ走りました。

した。

前に已述べましとよつた私は、三才の年から春夏秋冬だとわす、毎月一回間水行することによつており、これまで一度

北風日肌をつきやし、髪はがつくして歯の根もありません。水をかぶり始めましたが、お腹目の声さえ出ず、だらだらに一生懸命に水をかかりました。

そして再び御宝前と坐って、

「これから毎月の水行は決して忘れませんから、どうか熱を下げて下さい」と子供心に一心に祈りました。翌朝までゆりした気持で床を離れることが出来たのはさうまでありません。

こんなことをお話しすれば、或はそれは送葬法によるものだ、と云う人もいるでしょう。然しそれは、こんな小さな体験の由だから、

「善蔵は生きている」

「神仏に誓つたことは、どんな事態であっても、つらぬかねはならない。たとえ自分を忘れたり破つたりしても、神仏は善蔵を受けて以来、昼夜に自分を思つてゐる。」

といつて事実を、最初に体験させられた

のです。そしてこの体験は、そのまゝ又達の本仏御尊をはじめとして三世十方の諸仏、諸天善神、地中日蓮大聖人から「星真仮子」として認められるほどの本光の沙門たらんと尊顕した、その尊顕をつらぬく意欲につらなりて行くのです。

たゞ怠れようとしても怠れることの出来ない昭和二十四年三月二十九日、六十得度式前夜の靈夢に答えられるほどの苦となつて行かねばなりません。

父が口説の如く言つよつた、私は仏として生れ、仏子として育てられて來ました。仏子とは同時に仏使の意であり、如来の仏勅をかしみ、如来につかわされて末法の世に、法華經を弘める勅使で

あります。

「我々が来るの前命を要す孩子たちと、
どすみるがうは、何よりも自分が医学の
二道の筋で、自己の信仰体験を通じて、
皆の法華経の真諦を伝えて来たがねとなり
ません。」

「ハレハラして驚いて、けわしくてさう。
ハレハラして驚いて、けわしくてさう。」

「驚異的である」

「驚異的である」といふて、この自分なりの
心事の實感が、江づらめき盡す事が出来
ました。

驚異的の雪山一体の立場から信
仰の眞実を照りたし、其等平和の
道を勧めします。
驚異を一人で山頂への人々にさす
す道です。

と確信するのです。

「おわり」

新井 駿郎
著者共 五十四

甲子三百五十一年六月

新井 駿郎(三〇九三三五四四四二)

卷・送部

“驚異峰 著者募集”

驚異たるといふ言葉のある人生の創造
しきじつか。

驚異的であるとはお驚きさまの
驚異であり、日本ハリ日本驚異人
の自然山です。

今年はいよいよ東京オリンピック、
取年十月中旬、オリンピックのリハーサルとして東京国際スポーツ大会が開かれ、大会の至る所でいつでもヨーロッパ、日本、米国などから来日した大記録百出連勝、その大記録は世界瞪目のもとであり

魔女と僧侶

「東洋の魔女」とまで報われている。然しその魔女には想像も出来ない日頃の厳しい訓練がある。その猛訓練ぶりには、わざわざ外国から參觀に来て運動選手ですら驚嘆している。

それに戴けて大衆氣概を標榜して采

た日本仏教徒俗の大半が、若んど形式化して修行らしい修行めぐらしの何とか、行なうことを考へておらず、先ず僧侶がすから念佛をしておらず、更に仏法の聖堂を築つならず、必ず僧侶がすから念佛をしておらず、少くとも「東洋の魔女」たる方らぬ義しに至る常精進の修行をしなければならぬ。布教伝道、広宣流布はそれからのことではないだろうか。

祖廟に祈る

酷寒の身延川に

身を投じて

身延山大学二年

木村義賢



その祭壇

去る十月、身延山御会院の夜、布教部の日高上人より学生有志に対して次のよう召説がありました。

「弘安五年十月十一日、御入滅の日も間近き日蓮聖人は、若冠十四才の絶一齋を枕もとに呼びませ、齋の頭を撫でながら、そのよ十一年の生涯において遂に果すことの出来得かた帝都開教、天皇大法華経宣傳を奏上するといふ大業と付属された。絶一齋の経一とは妙法蓮華經。序言第一の意、後の龍華曰像二人である。

上人口二十、四才の年、宗祖の遺命を果すべく墨生の大苦痛を起した。そして十一月二十六日より翌年二月七日までの一百日の間、夜半の二時頃より、旭日が水平線上に昇る夜明けまで、毎夜四時間ばかり、鎌倉由光ヶ浜の海中に鞠までつかって自殺傷一百巻

お題目千萬巻を奉齋した。

また夏間は出金を谷妙本寺御在所堂内

において縦一寸七分、横四尺あまりの水

面一枚紙の上に法華經一部八卷二十八

呂六万九千三百八十四文字の細字を写經

として蓮葉の葉、極目的光明、海上に波

蓮目にて寫する等相を慈傳。

その後、泡二、青瀧、小瀧、小松原、

牛山、佐豆伊東等々の宗祖の靈廟を巡拜、

身延山では座敷にて蓮面の參籠をした。

その鑑譽の日、草庵の庭に清水が吹き出

た。清・名残か身の身延山西谷の清水坊

である。

更に日像上人は身延より旅度の靈跡を

巡回、光陸を至て永仁二年四月二十八日

建長五年の宗祖立教開宗より四十二年百

に当るその日付の日、京都の栗原東門に
立つて西院御在所堂にて宣教した。

時年二十六才。

ト先秦、三點三筆の及麿弘教、七十、四十
の生涯と終じて、遂に宗祖御在所堂の
靈廟へ入廻して死のである。

宗祖も善法裏相釈の中で、

ト芭蕉の苦難の出現にあらずば、唱え
難き題目なり」と仰せられてゐる。所詮
法華經は村愚の書でなければ受持も宣布
も能くする」とは出来ない。

村愚の者であるさらば、十四才の經一
夢が宗祖の村愚をかたこめて、二十四才の
十月二十六日より由来り渢までの一百日間、
法華の大流行を發行したよう存續が、

おのずから異歎されて来る。

私たちが果して法華經の村驛を抜けた

者があるかと云ふことは、私たちは
必ずしも発現する爲めだと、心から思ふことを
あります。

十月二十六日の日も前述し、若し私は
ちが、この日を期して祖廟周辺の身延山
の清流に身を没じて翌年二月七日まで一
百日間、寒露の中で日夜獨處を參籠する所
らは、まだ意義ある修行といつていいづれ
まいか。」

この話を聞いた学生有志は發奮興起し
ました。そして互にさういひ励ました
つて一百日間、祖廟靈山塔の下の身延川
の清流に、向までつかつて自抜闇三昧、
お遍身百巻、遂さら上へては御顯岩の前
にめり下さき、同じく自我悟三昧、お題目

自暴と革面し始めたのです。

これに日暮に人の自義島百巻、お題目
千巻にくらべれば物の数で曰なく、裁
に度しい限りではあります。それでも
本山より祖廟往復するのに一時前三十分
必竟します。學校と古山野務区もつ学生
ことつては、又、やを乞得せしものがあ
ります。」

然し、この修行は素の日、月の日そし
て宿の日も毎日べくことづくん強づられま
した。寒では十二月に入つて、寒風に震
しくなつて来ました。
然し学生一周、ます／＼勇氣を奮い起
して、遂に百日の中、五十日旣を越す
ことが出来たのです。

「一月、二月に入れば、寒ではいよいよ

厳しくなつて行くことでしょう。身延の川渓には氷がけります。その氷中に胸毛をつりつていれば、皮膚は二ヶ、全身はアカギレとなりましよう。

参し、二二まで来れば、もう退塾することはない、と信じます。何故ならは水行に参加している者は、既に二の間、この修行を通して、それそれに修行の尊さというものを体験し、認識していくからです。

因に祖廟看守一百日の水行に参加して

いる有志の名前を列記すれば、

○身延山市教部

　　日高白象

身延山大学三年

○小寺崇元、浜島法立

○身延山大学二年

小林白峰、藤原成憲、和田吉弘
佐木友学、高山忠司、木村義賛

○身延山大学一年

石橋 茂

○身延山高校三年

石川義君、田嶋侃

○身延山高校二年

神藤文四、河野由起、長坂穂哉
看木信和、勅使河原竜彦

○身延高校一年

武村吉規、竹内俊介、木野有三

柴田秀雄、松本毅、林 教司

木名彌弘、以上二十四名

次に先日開いた「水行参加学生有志の座談会」の模様を、録音テープから伝

えてみましょう。

各自の水行心願

日高 百日前の水行も、もう五十日の跡を越えた。その間、各自に色々と貴重な体験を得たことと思う。そこで、

そこの体験を語りあって、お互に今後の参考なり「頼ましく實したい」と思つて、その前に水行する以上、それべく志願をもつてじたることと思うので、先ずそれから……。

藤原 これは私はかりで口ひく皆もそうと思つが、今度の水行は日高一人が日衆上人の請したこれで修行を提唱喚起されたことに端を発している。

起つて日衆上人の由比ヶ浜海中一百

日の修行にあやかって行する中に、日像上人が宗祖から運命されたよう伝来経宣布の付属を、みすから修証すること、そして更身弘法の布教の出来る法器となるといつて、これが修行心要の根本となつてゐる。

一同 然り(着手)

日高 身延山を世界外離太身越よするこゝら、私たうの志願の根本とななければならぬ。

一同 然り(着手)

小寺 もう少し本流を心懸から、更に幾多真諦的苦惱も派生して来る。私は次のことを水中に祈願していた。

1. 忽布教の急附力養成

2. 八風不動の崇念確立

3. 自分の先祖苦悶・有縁無縁の万葉

ト冠する遺言

女、大聖教廟に直接必要な靈能力をさ
すかう」と

う、總じては正法開闢興隆のためにには、
私は私なりに十二分に君勲出来るよ

う導きに付きといふ事

一同 仙法興隆、忍耐力、農念の建立先

祖や有縁無縁の靈く討する回向は、
それく、木中を折つてしる」と曰。

武村 老年父が病氣の時、身延山大學三

哥の兄が、二十一日間、身延の奥之院
に白参した。今度は祖母の体が悪いの
で、私が毎日河の中で平蔵を折つてい
る。

木村 父母兄弟の健康は、朝のおつとめ

の時で心の中に念じている。

和田 私の父は五回目の荒行堂入行中な
ので、父の怨恨未満をあわせて折つて
いる。

日高 さて、や靈感、靈能力をさすかり不
いふといふこと書きわたが、これと同
じの靈能者といふ者は……。

五名 (ほんとうする)

日高 人を折つておこして靈感、靈能は
あるに極しまじけはない。比較的ま
と三脚六通の神通力を真摯しておられ
た。日蓮聖人も幾多の奇蹟をおらわされ
た。日蓮聖人も百日修行滿願の時に
は夢題目の奇跡を感得して、そのお題
目を生涯用いらされた。

恭し靈感、靈能は天よりおのずから

与えられたものであって、決して自分
から求めてやるのではない。仏教の教
えを過る以上においても同様である。

真正の妙道は

悟って知るべき法なり。

修すべし求むべからず

まして況んや靈感、靈感においてお
らぐであろう。但し如說に修行する所、
諸天より心す感應する。感應があれば
必ず奇蹟は起る。

肝膽古ことは靈能と現する、ことさ
は至くて、ひたすら如說に修行する
ことだ。すると求めずして靈感、靈
能はこすかて来る。

行中の瓊杵

浜島 私は三十七年六月の頃から持

氣してじた。裏面はき憑依體が三起
つたりしてもじた。

前が今度の大病を始めて、一週間ほ
かりたってから電話してみると、不思
議にも私が大病を始めたばかりのよ
うに良くなっていました。電話した日には、
母さんと一緒に散歩に出かけて留守だ
った。

私は、「この体験から「修行すれば諸天
が動く、諸天が動けば鬼神は起る」」

という信念をますへ深くした。

田畠、これ不思じられるい者……

一同（あなたと）

曰高 離信する者……

一同（ハ拍手）

清水 私は木行する前、看護に面丁が出

来て了一た。これがよくなつたと思つた
ら、今度は罪に出了、罪がよくなつた

と思つたら、次はオヘンの下へ出だ。

一同（爆笑）

清水 所が水行を三回したら、何時の間
とか、よくなつていた。

修行は樂しい

小林 初めの頃、真暗な河の中へ降りて
行くのが、恐いような気がしていただ
が、もう恐くない。

佐々木 生れて初めてのことだけに、
死んでしまうので口ないかと思つたが、
生きていた。

木村 今では水行時間の来るのが、もし

ろ待ち遠しい。

袖藤 皆いそぐと湖へ出かける。

小寺 大鼓をうって堂々とだ。

木村 それにして、も萬歳生(ままでか)、よく
やるのに感心する。尊いことと思う。
今後も続けてもらいたい。

藤原 部合が悪くて水行に行けない
とあると、次の時まで一日中気持が
悪い。

和田 本山についても学校へ行つてもロク
なことはない。

日高 そつとうとが感じられるのは各
自の心態が異なった結果だろう。

和田 初めの頃より一貫目もやせた。

石川 多くれどもかれ皆体重がへつてい

る。

小寺 水をかぶるよりも、窓にうたれろ
よつも、木の中で脚までつかる方の方

が、よっぽどつらい。首までつかると
声も出ない。

小林 河の中よりも、河から出た時の方
がつらい。寒さに体が一瞬え切れてい
て埃くこと出来ない。首タオルをか
ぶったまゝ、普らく、じつとうすくほつ
てしている。

藤原 河の正面に向かって立ても、風う

づいて手足が動かない。

藤原 これがうめくと寒くなる。石垣も
乗りついでくる。下る時よりも上の時
は充分注意せねばならない。

石橋 然し、そうした苦難を克服して行
く危険は大きい。

浜島 重たちの木舟が何時の間にか群馬

になつて身延の町中の人々が進んで各

々万能扶養をされる志が強しい。御供
義田毎通土産田、木舟がすんでもら祖
廟入日の音と坊さんで真くが、そつし
た人々の温い心には感動される。

小寺 在廟の河の中へ移行していくのだ
から、大陸へ渡被難されてくるという
実感は強し。つらい時、宗祇の忍辱を
思つ。

木村 信金はまださつて伏られる。体験
行くして眞実は悟られぬ。日蓮聖人
が示された法華經の眞実々相を把握
し、それを自分の法門として、眞実を
眞美のまゝに説する宗教者に、一日も
早くなつたいものだ。

日高 指も鼻も紫黒になつてしまふ身延
川の中へ、骨立つぎ通す寒流に抵抗す

う」といふへ、素然として本仏の一念の中に住して、いる自己に発見するが、今後一層の努力をしてもらひたい。

たとえ全身に東リツキ、失心して流れに押し流されるようなことがあった

としても、私界に住する層の一念は、動だらめせず、合掌した手も縮れまい、というような自己でありたいものだ。では、この辺で……。

へおわり△

教義 一度とない時

感のときの住職が漏算の時間と一心に漏算の漏算をしてしまった、新参の子弟がおわて、これまでとめました。住職は答えました。

「おまえが漏算をしてしる間、お前が

一聲も漏さうにも等しい。漏算は無事である。やけがえめなじ人間一生で只今と一つ時間は一度も二度も来ない。私は漏算を書むよと時間と書む。それは仕事を重んずると同時に、自分の命を重んずるからだ。

私の仕事と取り上けるならば、その間私はほんやりしていなければならぬ。ほんやりするといつも漏算を失ふことに。

「この住職こそ、後に近世の名流と仰がれたに至つた或る日の豈日日諫と云々とぞした。
〔沢田覚象〕

☆信仰相談室☆

創価学会の動向と

日蓮宗青年運動の在り方

象白日高その一解答

おたずね

戦後、西後のタケノコといつよりアライカコレラが蔓延するかのように、日本全土に蔓延した創価学会——それは眞誠ある人々を薙ぎ殺せしめていますが——それともか、わらす学会勢力は今や我が国の宗教界はいづまでもなく、政治の上にまで侵蝕して来て、このまま放置出来ぬによう危険な脅威を抱えて置して来ています。

一体、学会の勢力は、これから何気なく拡大していく行くのでしょうか?——國へどうこよれば、

「学会勢力は既に三百万世帯、今はや限界にまで来てゐる。若しこれ以上拡大するならば、却つて分裂したり内部崩壊を來す恐れがある。そこで学会の最高幹部では、このため対外的な布教よりも内部を固めるのと、やつとになつてゐる。楚々て学会が、もうこれ以上拡大すると云ふことはありえない」

といふ說もあれば、
「學会は大きな壁に突き当つた。今に
見て、いよいよもう近い中に學会は、つぶれ
てしまふ。火のようにな燃えてかゝるもの
は、火が消えるように消えてなくなるも
のだ。」

と素観する說もあり、「これとは反対に、

「學会も此處まで来れば、もうつぶれ
る」とは無い。たゞえ眞善方針は、その
時その時の必要に応じて変更する」とが
ある。たとしても、絶対し得ながらでも維持
されて行くだろう。

と、いう說もあり、更には、

「三百万世帯に達した學会は、昭和三
十八年度の一ヶ年間を通して全員の數
學武裝をした。そこで她的武裝を廻して

學會が、これまで火のように燃えさかっ
た後戻り一転して今後、水のようを漫透
化せんかしに出るか、それとも以前にも曾して、
火山の爆発するよな爆轟的後戻りに出る
のか、全く余談は許されない」

と、いうようなる說も起つて来て、いるよう

です。

毫も無く、いずれにしても學會の今後の
動向は、宗教界の各宗派にとっても、政
界の各政党にとっても、良縁あるすべて
の國民の大公害大事であると思ひます。
まして學會折伏の真義た立つて、いふ曰蓮
宗にとっては申すまでもありません。

一体、學會は今後どの方面へ、どのよ
うに動いて行くのでしようか?
次に、この問題に周連して考えられろ

ことは、日蓮宗における青年運動の在り方です。

申すまでもなく学会勢力の主力をなし
ているのは、九十万の青年行動隊です。これに割合される面もあってか、宗門内
でも各般た青年運動が盛んになって来て
いるようですが、その運動は如何に在る
べきか。こうづか。

君の要請に応じて青年会を構成してお

の。これとどのよつて指導し、どのよ

うに運営してよいのか、ア惑つて いる傾
向があるのでないをしようか。

たとえば宗門青年運動の在り方につい
ても、次のような二種二様の意見があり
ます。

A の

「現在の日蓮宗で最も欠けているもの
は、組織的で布教体制である。そこでそ

の組織の中核を宗門青年會に指向し、宗
務院から要請、或口意令にて全國六千ヶ
寺の寺院、教会、株社に、それぞれ青年
会を結成せしめ、全國的な宗門青年組織
を確立する。そして宗務院なり總本山身
無よりの書面で派遣して活動する組織的布
教を全國的に展開する」

という意見。

A の二

これに対しても、

「中央集権的で全國組織という一律的
体制は、教祖中心主義の新宗教だから
では可能であつても、本尊の本山・末寺
という關係や法縁關係等の、既に解消さ

れだとほじえ、そういう伝統をもつ現在の田舎業は直ちに當てはめる、ことは不可能に近い。

さて一律的で中央集権的組織は、一県力強じよつにはみえても、ひとたび危機が来れば、これほどもろいものはない。

さて宗門の組織といつもの如、上か

う下へ一律に指令されば、うるさいと云はれるものではなく、あくまでもこれから盛り立てるものであり、地方の各青年会は、その特色をそれべくにもぢながら、中央はその連絡事務機關というやうだ。若し全国的組織が出来たにせよ、その主体はあくまで地盤を守るための青年会でなければならぬ。

しかも組織が人間を造るのでなく人

間が組織を作るのだから、中央は日本新聞などで青年運動を報道すると同時に、地方をさかね、たゞ、青年会に組織する人の入籍を禁め、それを兼ねてのことで、銀をもつておらぬから、この二つの運営を。それがもつておらぬから、Bの「

「一般青年の手始め、慶祝演説するが、平井は専門の知識を持てない」といつ家庭が豊い。送つて青年会が結成するにしても発展させるに一役め、なかなか困難である。

そこで先ず青年が集まり易いよつた旅館としても靈廟参拝あるとか、音楽会にしてお講じ歌であるとか、そういう青

教的クリエイションを中心として、その中にあくまで伝統、曰蓮聖人の一派をはじめ法華經の教えと解り易く話するようにななければならぬ。

この意見があり、「これに対する」

(C)の二

「青年の教育を圖るために開設する以上に日本青年会は發展しない。西」

西の如きがそれら青年会の運営をよくなるにあつた。

あなたがち青年の宗教的クリエイションを否定するわけにはないが、青年に限らず今までの相信徒に対する布教の大半は、意地張りクリエイションに終つてゐる。

このため宗門全体の沈没が生じてゐる。

若し宗門が布教の活潑を展開とし

ものたゞ青年運動に期待するならば、各青年会はクリエイションよりも、科學の二道の研究といふことに教育の主眼をおねはせならない。

「青年会、青年会」としての教育の主体性

は指導者の一念にある。この指導主体性

と青年会組織の人物構成主体性とは混同してはならない。

西の青年会教育の主張を、指導者の一念にとどく青年会員において、青年の集いが維持されるとするならば、それ曰指導者の責任である。その青年会はこれまでのものにするつもり」

という意見もあり、或は

(C)の一

「青年会は青年の集い、らしく、青年の

のものであつて年輩者の介入は遠慮すべきである」

という意見と、

この二

「青年会は相信徒とは別個のものであつてはならない。毛(も)の相信徒の中の青年会であつて、青年会は青年の自主性を堅持しながら、年輩の相信徒がオブザーバーとして隨時参加することは、毛の相迎すべきである。

毛の青年会にオブザーバーとして参加した年輩者が、熱心のあまり住々にして自己的の学識経験をひり廻わすことがあるが、これは嚴重に注意すべきであることは云う所でもない。

かくして青年会が自主性を保ちながら

相信徒の意見、毛後で得て行くならば、必ず／＼熱心兩面から肉体同様の発展が期待されるであろう」という意見とがあります。

以上、日蓮宗青年運動の毛の方について、このようなる種々の意見が出ていることを長々と述べてみましたが、これが最も正しい意見であるのか、それとも外にもっと良い意見があるのか、更に指導者としては如何なる具体的指導性をもつべきであるか、というようなこと等を併せて御教示され幸いに存じます。

大阪 音明寺 有吉 王門

おへだえ

大へん重大な、しかも広範囲至上、細

部大臣の御質問ですが、恭しこれは今日

の日蓮宗門人として心ある人々の率しく
考へておられる事、思われますし質問者も
おぞらしく個人的立場といつより宗門
全体の立場に立つて、代表的立場でこれ
たもの、思われるますだけに、解答するに
当つては非常に重い責任が感ぜられます。
そこで私の考へを参考に供するといふ
こととて、解答に代えさせて願いたいと思
います。先ずオーディト劇術学会の動向から
述べてみましよう。

A

「劇術学会は前の参議院選舉の時、十

三名の議員を二国会へ送り込むことに成功
した。そして藍ちゃん公明会という政治團
体を結成すると共に、三百万世帯の全会
員をあけて王公冥合・オニ文略を旗印と
して次に次の議員を紹介してみましま
す。

始終熱する討議が重ねられました。

さて会が終了してから、同じくこの会
に出席していた学会折伏布教のペテラン
竹内泰厚師と個人的立場を有する中、か
ねて講演会へ投書委嘱されていた劇術學
会の今後の動向について、竹内君の意見
を求めてみました。竹内君は眞剣に語り
きした。それは意義ある方針でした。そ
して 次に次の議員を紹介してみましま
す。

昨年（昭和三十八年）の暮れも過つて
十二月十一日、東京の日蓮宗宗務院にお
いて新興宗教対策委員会が開かれました。
委員会には宗門一派メンバーが集つて終
~5~

審士大石寺を本とする本門戒垣建立へ向

つて更に破竹の進歩を開始した。

然し、この理想的の政治的実現に日、衆議院の議席よりも衆議院の議席と獲得しなければならぬ。

そこで昨年十一月に行われた衆議院選挙の票、あらかじめ学会は全国に四十八名の立候補者を準備した。

ところが衆議院選挙は、参議院選挙の場合と違って、全国区の選出というものはなく、大体地方区であり、しかもその始望はネームバリューのある旧政治家におさえられていて、新人にとっては非常な苦戦が予想された。

若し学会四十八名の立候補者が、選挙のまゝ、学会全体の致命的打撃となるで敗北したならば、そのこと自体がそ

う、学会の傷害、一人の落選者が出ればそれだけでも学会信仰に打撃を来る。学会立候補者は信頼の名においても一人でも落選されない。

そこで学会は、ひとまず衆議院選挙に臨む候補者三百八十九度を挙げ、全国四十八名の立候補者と、学会本部の隸もとである東京都内二名にしほり、しかも学会議員升進士と国民党的名で立候補としめた。学会は、この二名の当選確実を信じ、更に全国最高点当選を企図して運動した。そして当選のつかつき、この候補者が学会裏であったことを公開すれば、それが学会の威力を宣揚する効果の大さいことをわかった。

所が、意外にも結果は無残であつた。

「おなじも親切にひいてお送りへ寄りて
しまつたのです。」

学会は興味が大いれて、だとえ此の二名が
学会の名において立候補してしまかつた
にせよ、この落敗が大きな試験となつた
（これが立候補でもなし）。まだ少く思つ
たに比して本事実と見てあらわれたの
ではない。

直ちに事務の移動が始まつた。という
のが參議院選舉の後、公明会を結成して
以来、主要な学会幹部が公明会へ歸つて、
自分の学会幹部が手離していたから
である。

学会は公明会の幹部を西山学会へ引き
戻し、母体の西山学会へ向つた。これは
来るべき選舉にそむえるものであること

は言ふまでもない。

学会として日本立憲台、共三文部を標
記して富士国立成道建立を全会員の目標
とし使命として、既に參議院においては
十五の議席を獲得、公明会改進運動を展
開していく以上、國家立法機關として參
議院で先行する衆議院において、たゞえ
如何なることがあっても、裏が絶ざる後
事を憂慮して躊躇して行かねばならぬ。

学会にとっては無近と被説の所これに
以て、この前進あるのみである。前進のや
う時、学会は分裂し崩壊する。たゞ前進
のみが学会の分裂崩壊を防ぐ唯一の道だ
のである。」

B

竹内派の熱血行とは一する言葉は更に義をもつてゐました。

「既に学会は全国会員の教學武裝を一遍して算術の強化結束が全國的で要請され、教學武裝の次に来るものとして実践強化が指令づけられている。

そして卒会に向つて、教學的とも最も手強の日蓮宗がなしては、

日蓮会は、日蓮宗で実行されていない他宗新法三乗教にやつてはいる。だから學會の方は日蓮宗よりも勝れており、日蓮大聖人の直系であり、正統の證拠である。どうかうな主義をするよつたなつて來てゐる。

則ち學會口、全國幹部に富む教學を實約に叩き込むと共に、教學論争の立場から実踐批判の發露へ進遷しようとしており、このことは學會の動向と、最も注意しなければならぬ重要なことである。若し日蓮宗の者が、學會の類マンダラ本尊釋迦輪とか、或は池上御承、身延相承という相伝釋迦輪などの教學的批判をもつて學會折伏に臨んだとしても、學會は毫も學會教學の主張を認下らないことは今までと変りはない。同時に、教學的論争に躊躇にもかけず、念仏無限、釋天は今までと度りはない。しかし、教学的論争に躊躇にもかけず、念仏無限、釋天といふかどうか、という実踐輪をもつて反対して来るようだなるであろう。

なく富士大石寺を中心とした王松冥合、

であろう。

国家国立武道館の建立と称する所調、学会流派の國家征服、統一に指向されており、その後継として国会の議席獲得とその増強をねらっているのであるが、富士柔学は、その手段にすぎない。手段である以上、普遍妥当的真理も正邪も問題ではない。

「」たるの教育との比較対照でさえ許されない全会員の教學武装のねらいがあり、この武装を差遞することによって教學斗争より実踐斗争へ飛躍しようとしている。今度の衆議院選挙では、表面には現われて口ひりにしても内面、二名の候補立候補者の落選したことによりみて学会は、次回選挙の必勝を期して猛然と戦う

～55～

衆議院選挙に前後して学会が、鳴りをしそめているのは、このための準備とみなければならぬ。学会が最近鳴りをしすめているからといって、豪傑豪傑は許されない。むしろ今後は見られて来るであろう学会の行動に、日蓮宗門自体万全の破折体制を整えねばならぬ。混戻を防ぐて態をなうことではなく、後手にならぬよう機先を制して、より一層学会破壊を猛烈にして行きなくくてはならぬのである」

以上が竹内泰存氏の意見の摘要でありました。紙数は既に超過していますので、私の所見は次号にて詳説する事としまた方」とおわせて述べることにいたしました。

〔未完〕

越智峰賛助会員

募 集

「越智峰」は身延山大学・高校の学生有志が、日本基督教連盟を主眼として一般の方々にも解り易く莞んで貢くため発行している月刊法連経済誌です。

雑誌の型は、リーダース・ダイゼスト二面じですが、将来雑集内容も発行部数も日本基督教界のリーダース・ダイゼストといわれるよう発展させたいと願つて努力しています。御協力をお願いします。

費助会員 一年 三千円

(分割納入可)

身延山靈峰会

原 稿 募 集

一、青年教化活動に関する記事

一、入信の動機などの信仰体験談
一、信仰塑造に資する記事

原稿用紙四百字詰十枚以次
一、教義、信術に関する論説

原稿用紙四百字詰三枚以内
一、蔬籜の所感、感想、意見、希望
一、教義商榷は主として青少年

一、メセナ毎月月末
一、申込は身延山靈峰会へ

身延山靈峰会

読者声

驚峰・第六号を読んで



東京県農業試験場

講述志録

皇紀に成りても何がとん
天に生れても田舎

龍女が歌をつゆ

摩利波多波是出丘尼の列に連るべし

あらうおし、あらうれし

南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱えさせ

給え

慶治二年三月二十日、富太尼録前

題記

〔國藏中・法華華經寺藏教義〕

「驚峰六号、日本政府の『我れ天上の榮華を求
めず』」という玉藻を讃美、開目翁の『我れ日本の
花となりん——』という三大誓願と共に、この『富
木尼翻訳事』の一端を思い起し、仏徒の自覺に生
きる大聖人の精神の根源にふれる想いがいたしま
した。

「あらうれし・あらうれし」

とお開口釈の結文である所の、

「日蓮が流罪は、今生の小苦なれば、
なげかしからず。後生には大樂をつくべ
ければ、大いに悦ほし・悦ほし」

と同じ大法悅の言とはしりてあり、二
の仏子の法悅なくしては、不自惜身命の
法華經の受持宣布、乃至口説安逆化もあ
り得ない、と深く思ひを新たにしたこと
でした。

バハツレ・ギイターの一節の中にも同
じ使命に生きるもの、法悅が沸つてゐる

人生医開拓しようとしています。

藤原君のような青年が、一人でも多く
今の系門から輩出することを心から願つ
身延の学生と共に街頭に立つて肺子吼す
てやみません。

次に信仰相發室「創始学会の松善的辨
他姓についで」と題する解説とも、日高

また身延山大学生藤原成憲君の「見捨
てられた民衆の中」という一文には奥と
深く感銘させられるものがありました。

今、我々日蓮門下の者は専しく日蓮大
聖人が「傳記羅刹子奉懺」と仰せられた
立場から出直すべきであります。

その点、藤原君の御正義の人念誦教共に
實に感動すべしものがあります。しかも
藤原君自身、素直に民衆の中の自己といふ
うものをつかみ、その弱の中から自己の

所の眞面目を悉くが披露され、大変参考になりました。

大型人の折伏は、練會當時のあの未曾

有の困難を前にして、
「一切衆生の一切の苦厄、悉くこれ曰
達一人の苦なり」

（）徳大慈悲と、法華經至上の德念に
立脚しての折伏もありました。

創価学会の如きは、宗教の創始にも等

（）勢力狭隘の折伏であり、その内容に
至つては大型人の折伏（）徳大慈悲泥
（）開闢があり（）す。

正が邪を破していくを折伏であり、邪が
正に、若しくは邪にあさいかつても、
折伏の名に値じしないこと口きづまでも
ありません。

最近、秋田管内本光寺の高野市が創価
学会の家と車両にたずね歩いて、片端し
りら折伏しました。

すると彼等は学会の事が判つても今さ
う真宗を嫌恨、その他真言宗との苦難
争へ口戦の氣合せず、いつその（）に而む
お羅刹の口邊（）へ入ろうと（）、「いや、
迷く萬葉布の本光寺へ改宗してしまいま
した。

大型人の仰びの通し「大慈は大善の起
るべき萬物」であり、邪法の異なるのは、
正法の異なるさきがけでありますよう。

日蓮宗も創価学会に創義され、いく
つか立ち上りの気配をみせてあります。
この好機こそ生かすべきで、そのためには
日武れ／＼若い者々結集して、ますもつ

て大聖人の根本的教義と行動を確立し、正法宣布に身を以てして行かねばなりません。

鷲澤義は文辛通り雲霧山の庵から宗門へ新風を送り込さんとしています。

身延山鷲澤会掌主一風の今後の御建計をおかれ祈ってやみません。



新年特大号

折込付録

一、叢書

西本願寺御著書を積め

今が時節には二度と来るまい

一、吉澤彌治「國ごそフナス」の序

この洋書の費用は次号に奈良学芸

大學慶應本蓮子さんが

「アーヴィングの折り」と題して墨載

いたします。

一、アンケート・ハガキ

このハガキは編集の参考としてまた発送

我れも致し一人をも教化せえ

前半は信忠より送るべく保

〔著法実相抄〕

範とみるこせて貢きます。編集部

謹 賀 新 年

今年もよろしく御指導御支援
のほどを御願い申上げます。

昭和三十九年元旦



身延山萬壽院

鷺澤 達 蘭 東 部

正月四日～九日



福岡・熊本の両県にて

九州街頭布教展開

才五家身延山学生布教別動隊

身延山学生二百名三十名は昭和三十八年の

(泊、八幡雜誌社、報恩堂王寺)

の夏休みを返上して高西方藍鑑布教を
要請し好評を博しましたが、今度は昭和
三十九年正月冬休みを返上し、才五次身

延山布教別動隊として正月三日身延山を
正月七日 福岡市と周辺都市

出発、四日より九日まで福岡、熊本の兩
県において宗務所主催布教研修会、修法布

正月八日 大牟田市と周辺都市
(泊、久留米妙正寺)

会等との後援のもと、現地寺院、相信院
と共に九州街頭布教を要請することにな

りました。

正月四日、五日 北九州市と周辺都市

などお願い申上します。

古事記の江差を御通船申上げ御支援の

第五回

編集

後記

身延山行掌講習会

時

昭和三十九年三月

春草峠岸後 三百四日

新

身延山 西谷庵行道場

金費

二千日

身延山布教部

◆「道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし」とは伝教大師の言葉。

◆「仏法は体なり、世間は影なり。体まづれば影もなぬなり」と曰蓮聖人の言葉。

◆裡密口判つてほいろが「生きる」という生々しい社会の現実に突き当つた時、身を立てるか、法を立てるか、「仏法を立てるのを先にすべきか、生活を立て

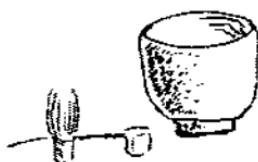
るのを先きくすべきかと深刻な動搖を感じ
す。

◆「この時、自己の使命感と自信を失つて
者は、やがて我が身と生活のために私法を

衰いものにして行く。」

◆少くとも自分だけは、そうでありたく
ないと思う者は、本年を度、私法を第一
として私法の中に生き生けされている自
己を見失すことですね。

△白象△



鷺峰 新年特大号

昭和三十九年一月二卷・第一号
通巻第一号

定価 五十円(千共)

昭和三十九年十二月二十日

印刷

昭和三十九年一月一日

発行

編集兼発行者

白 象

象

印 刷 所

甲府市櫻町八天野櫻草堂

発 行 所

山梨県身延町身延山久遠寺内

身延山鷺峰会

電話(身延山)二番三番
鷺峰口座(甲府)三九三番

予約額布欄 半年 三〇〇円(千共)

一年 六〇〇円(千共)
一年 三〇〇円(分冊可)

賛助会員